批評対象本の簡単な紹介

浅野幸治

今回の合評会特集で取りあげて批評の対象とするのは、竹之内裕文『死とともに生きることを学ぶ――死すべきものたちの哲学』（ポラーノ出版、2019 年）である。ここでは、この批評対象本をまだ読んでいない人のために、この本を簡単に紹介する。

まず、著者について述べよう。著者である竹之内裕文は、1967 年に生まれ、1986 年に東北大学理学部に入学する。1988 年に筋ジストロフィー患者の阿部恭嗣と出会い、阿部の介助支援に取り組みはじめる。1991 年に理学部を卒業後、文学部哲学科に学士編入し、そこで岩田靖夫からハイデッガーの手ほどきを受ける。1993 年に文学部を卒業後、大学院に進み、2002 年に書き上げた博士論文の題目は「ハイデガー哲学とキリスト教――初期の「宗教現象学研究」を手がかりにして」というものである。同年秋に竹之内は、在宅緩和ケア医である岡部健に出会い、翌 2003 年から死生学の研究を始める。2006 年に竹之内は、静岡大学農学部に就職する。農学部での所属は、人間環境科学科環境哲学研究室であった。その研究室は、現在、生物資源科学科農食コミュニティデザインコース哲学研究室となっている。編著書として『どう生き、どう死ぬか――現場から考える死生学』（岡部健・竹之内裕文編著、弓箭書院、2009 年）、『七転び八起き寝たきりいのちの証――クチマウスで綴る筋ジス・自立生活 20 年』（阿部恭嗣著、竹之内裕文編、新教出版社、2010 年）、『喪失とともに生きる――対話する死生学』（竹之内裕文・浅原聡子編著、ポラーノ出版、2016 年）、『農と食の新しい倫理』（秋津元輝・佐藤洋一郎・竹之内裕文編著、昭和堂、2018 年）の 4 冊がある。

さて、本書の簡単な紹介に入ろう。本書の章立ては、次のようである。

序章　どうして生きてきたのですか？――父との別れと出会い
第 1 章　介助することと哲学すること――「自立ホーム」で学んだこと
第 2 章　「人間」の出来事としての死――在宅緩和ケアの現場で考えたこと
第 3 章　土地における「生」の継承――死者と共にある農村との出会い
第 4 章　いのちに与って生き、死ぬ――マタギの背中を追いながら考えたこと
第 5 章　限界づけられた生の希望――共に生きること、本当に生きること

第６章　森と湖の国の「福祉」――他者と共に生きるためのレッスン
第７章　人間の生の拠り所としての「ホーム」――ホスピス運動の源流から展望する
終章　死すべきものたちの哲学――死とともに生きるための実践

竹之内は、「死とともに生きる知恵を学んできた」と述べる（４頁）。それは探究の過程であり、探究を導くのは問いである。それは、「どう生きるのか」という問いである。経験から問いが生まれ、問いの探究が経験をとおして深まっていく。かくして本書は、自伝的に語られていく。竹之内が目指すのは、死すべきものたちの哲学である。ここで「哲学」は、教説を意味するのではなくして、「哲学する」という行いを意味する。したがって、「死すべきものたちの哲学」は「死すべきものたちが哲学する」ということであり、これが哲学対話の実践になる。詳しくは、『死とともに生きることを学ぶ』を読んでいただくしかない。

批評対象本を読む前に、また読んだ後で、読者が以下の批評や著者応答を参考にしていただければ幸いである。